

# 最後の暗号

大村伸一

すべての暗号を解読できる簡単な方法を思いついた。

本屋で何冊かミステリーを買い、そこにある暗号を解いてみた。楽勝だった。

図書館で暗号数学の教科書を調べ、最も難解な暗号に二、三挑戦してみたが、どれも数分もかからずに解読できた。

効果は絶大であり方法は簡単きわまりない。誰かがすでに気づいていそうなものだが、そんなニュースは見た事がなかった。みんなが知る前になんとか儲けることを考えたほうがよさそうだった。

簡単な方法なのでプログラムにして売れば大人気になるだろう。そう思って、プログラムを作ったら一晩でできた。本当に簡単な方法なのだ。

それを使ってネットを流れているデータを拾い、解読させてみた。不思議なことにうまくいかなかった。そのバグを見つけるのに一時間もかかったが、修正は一行だけですんだ。それから次々と解読に成功した。

プログラムが完成してから考えてみたら、このプログラムを売れば誰にでも暗号解読ができるようになり、わたしだけがこの秘密を知っていることのメリットがなくなる。

第一、そんな危険なものを売れば当局が黙っていないだろう。犯罪者にされてしまうかもしれない。

そんな危険を犯すよりも安全に大もうけをする方法を考えたほうが賢そうだと気づいた。

ネットを流れるデータを無作為に解読し、大儲けにつながりそうな情報を探してみた。そもそも誰も解読できると考えてなどいないので、どんな情報でも手に入った。

例えば、世界的に有名な某企業の軍事技術の極秘研究プロジェクトの事業計画であるとか、ある希少鉱物の鉱脈を発見したという報告書であるとか、某国の大臣が秘密裏に幾つかの国の大企業の CEO とハリウッド女優のランキングを巡って議論をしているメールとか、宇宙衛星からの嚴重に暗号化された通信では、宇宙人の大艦隊が木星の軌道を超えたという報告もあった。

これらの情報が、例外はあれ何か重要そうだとすることは分かるのだが、残念なことに、わ

たしにはそれを利用する方法が何も思いつかなかった。

情報を利用する才能のある仲間を探したほうがよいのではないかと気づいたが、仲間を見つけるためにどうすればよいのかが分からなかった。

そんなことを悩みながらも、わたしは方法の改良を続け、応用分野を研究し続けていた。プログラムにして客観的に眺めることができるようになって気づいたのだが、解読の手順を逆にしたり、プログラムの左右を裏返したりすると、暗号に使われた鍵の文字列が分かったり、暗号アルゴリズムが分からなくても同じアルゴリズムで暗号化したのと同じ暗号文を作る事ができた。つまりこの方法はあらゆる暗号に対するマスターキーだったのだ。

その研究過程で偶然に発見したのは、このプログラムとそれを逆順にしたものとをすこしひねりを加えて重ね合わせて実行すると、DNAが解読できるということだ。

人間のDNA情報を集めているDNAバンクにログインし、そこからある人物のDNAコードを入手した。それをプログラムにかけると三十分ほどで解読は完了した。解読によってその人物のクローンが作れるのではと思っていたがそれは間違っていた。解読したものが何を表しているのか、何度読み返してみても分からなかった。文章としてのパターンはなく、どこかの国の言語で書かれているのでもなさそうだった。それでも一晩眺めていてふと思いつき、その解読データをまた解読プログラムにかけてみた。そのデータの意味がわたしに分からないということは、それもひとつの暗号なのではないかと思ったのだ。

その解読は、朝から始めて夕方には終わった。解読したデータ量は元のDNAの数倍になっていた。出てきたデータを一目見て特に迷う事もなく、ふたたびプログラムにかけようとして、入力データの増加に伴ってその計算が一週間程かかることに気づき、途中結果が失われるようにプログラムを修正した。確かに計算は一週間かかり、予想通りディスク容量不足で二度計算を止めなくてはならなくなった。それでも解読は成功していると検証プログラムが保証していた。

まだ解読結果の意味は分からなかったので、もう一度解読する必要があった。

ディスク容量不足やプロセッサの能力の限界だけでなく、予想できない事態で計算が妨害されるのを防ぐための手段を講じて計算を始めた。月に一度ほどプログラム自分では手に負えない状態になったというメッセージを受け取ることはあったが、三ヶ月後、解読に成功した文はこんな風に始まっていた。

「世界はことばである。ことばとことばの隙間には怪物が棲んでいる。その怪物には七つの太

い尻尾があり、その先端はすべての生物の心臓に突き刺さり分離されたものを繋いでいる。怪物の目は開かれたことがないが、その目の中にこの宇宙が隠されている」

文法には適っているが意味はよく分からない。だが正しいメッセージに近づいているのは確かだ。わたしはもう一度、そのデータをプログラムにかけた。今度は計算に三年くらいかかるかもしれない。おそらくむきになっていたのだろう。地下室の冷蔵庫をどかして電源を確保し、地震や火事でも停止しないように保護カバーも作った。計算が終わったとき、わたしが忘れていても思い出せるように警報とも連動させた。そして計算を始めた。

今回の解読は終わるまでに四年かかった。すっかり忘れていたので深夜に突然警報が鳴り始め睡眠を中断され驚いた。検証プログラムの起動方法も忘れていたが、四年前に書いたメモを見てなんとかチェックを三度実行した。間違いはなかった。

今回も解読結果は相変わらず辻褄の合わない文だった。もう一度解読するしかなかった。もう一度もう一度といつか意味の分かることがあるのかどうか分からないままに解読を続けた。解読にかかる時間は次第に長くなり一度の解読が十年を越えるようになったときは、遺言にその計算が何であるかを書くことにした。

六十歳を幾つか越えたとき、癌を宣告された。発見が手遅れであと半年の命だと言われた。すでに死は恐ろしくはなかったが、DNAの解読結果を見届けられないのが残念だった。しかし、宣告されてから数日後、幾度目かの解読が終わり、わたしは信じていた通り真実に迫ったことを知った。そのときの解読文はこうだった。

「もう一度繰り返したら世界は終わる」

意味は明瞭でありそれがDNAを設計した誰かからのメッセージだということははっきりしている。それ以上解読を繰り返すことはあまりにも危険だが、わたしには失うものはなかった。本当のメッセージを明らかにするべきだと思ったわたしは、もう一度プログラムを起動した。

\*

わたしの死の当日、あの暗号解読法を見つけてから五十年近くが過ぎていたが、あいかわらずこの簡単な解読法にわたし以外の誰も気づいていないようだった。誰かがもう気づいてもおかしくはないのだが、そんなニュースは見た事がなかった。みんなが知る前になんとか儲けることを考え続けてきたが、死ぬまで何も思いつかなかったことが心残りだった。

